第20回　和歌山県弥生・古墳時代研究会　　令和２年１月25日

－弥生・古墳時代における紀伊と東海の地域間交流とその背景

和歌山県立
紀伊風土記の丘

# 下里古墳の立地とその背景

河内一浩

１．はじめに

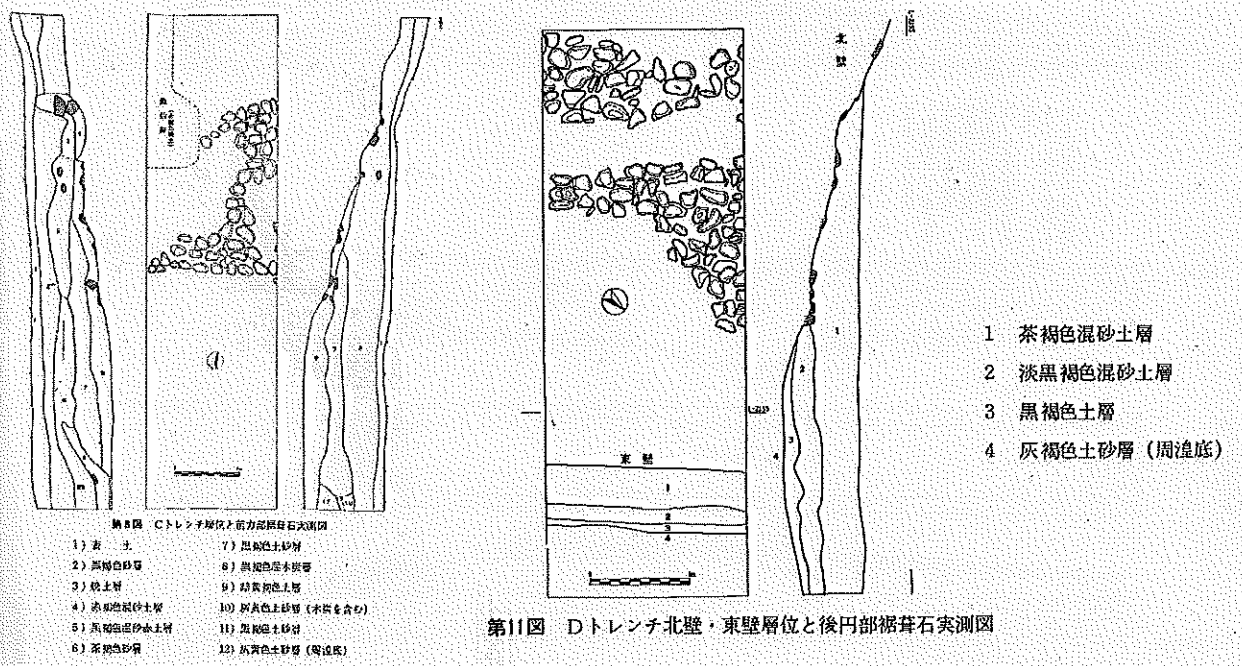
２．古墳の概要

３．紀伊沿岸古墳と海路

４．まとめにかえて

紀伊半島前方後円墳分布図

墳丘は、昭和 47 年(1972)の１次調査で後円部東側裾部・南北くびれ部、平成 12 年(2000)の２次調査で後円部北東側裾部・前方部前端、平成 17 年(2005)の３次調査で前方部北側２箇所・後円部南側裾部の調査成果により、柄鏡形の前方部を持ち、段築は認められず、墳丘主軸は南北でその長さが 40mであることが明らかにされた。また後円部径が 21.5mで、墳丘に沿って幅約５mの周濠が存在し、前方部側は馬蹄形を呈する。全長が 50m に及ぶ。葺石は、墳丘の頂上部を除いて周濠底近くまで残存する。縦 30cm、横 15cm の基底石と見られる扁平な円石があり、径 15～20cm 程度の円石を墳丘斜面に対して垂直に突き刺すように葺かれている。




第8図　Cトレンチ層位と前方部裾葺石実測図

1）表　土
2）黒褐色砂層
3）鉄土層
4）赤褐色混砂土層
5）黒褐色混砂水土層
6）茶褐色砂層
7）黒褐色土砂層
8）黒褐色混水炭層
9）黄褐色土層
10）灰黄色土砂層（水炭を含む）
11）黒褐色土砂層
12）灰黄色土砂層（周濠底）

第11図　Dトレンチ北壁・東壁層位と後円部裾葺石実測図

**図３　１次調査葺石検出状況**

下里古墳からは円筒形や壺形の埴輪は確認されていない。１次調査では、周濠から二重口縁壺が確認されている(佐々木 2016)。復元口径は 25cm で、二重口縁は短くやや外反し、先端を丸く収めている。形態は東海地方の影響を受けた“伊勢型二重口縁壺”である

２次調査では前方部の周濠第３層から甕が出土している(佐々木 2016)。復元した口径は 14.0cm で、緩やかに外反する頸部に続き、口縁部は短く外反しながら立ち上がる。端部は内面に肥厚する。体部は球形で、最大胴径は中央より上位にあることになる。

土器から下里古墳は４世紀後半の築造と考えられる。

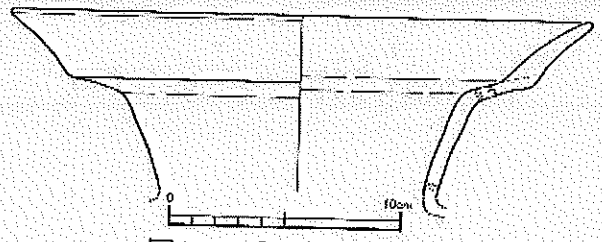



図2　二重口縁壺実測図

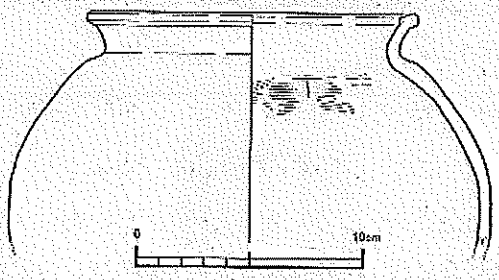



図3　甕実測図

**図４　下里古墳出土土器実測図**

昭和４年に後円部で竪穴式石室が発掘された。その際に多くの玉類や鏡が発見されたというが、残念ながらその時の記録もなく出土品も行方不明となり石室も埋め戻された。後円部墳頂部には蓋石と思われる扁平な石が散乱していた。

昭和47年の調査では昭和４年に確認された竪穴式石室を再発掘したところ、石室内に充填された土砂から中世以降の祭祀遺物とともにガラス小玉、管玉、鉄片が混入されていた。床面の中央は大きく抉られ、石室の北壁は大きく破壊されていた。幸いにして、石室の西壁、東壁と南壁の大部分が残っていることが確認できた。

石室の主軸はほぼ東西で、全長 5.35m、内法 4.75m、西壁基底部幅 0.65m、東壁基底幅 0.95m を計測できた。確認できた側壁の高さは両端部で 30～40cm であった。また、両端部には床面が残存した。平坦で叩きしめられていた床面の上には小砂利が敷かれ、検出した範囲に粘土は認められなかった。石室構造は、西壁の平面が丸味をもたせる石積みに対して、東壁の平面は直線に積み上げられ東西の小口と異なる。これは県内はもちろん全国的に類例を見ない石室であることが報告されている。なお石材は当地域産の砂岩で、人頭大の割石と川原石の平積みあるいは小口積みであった。

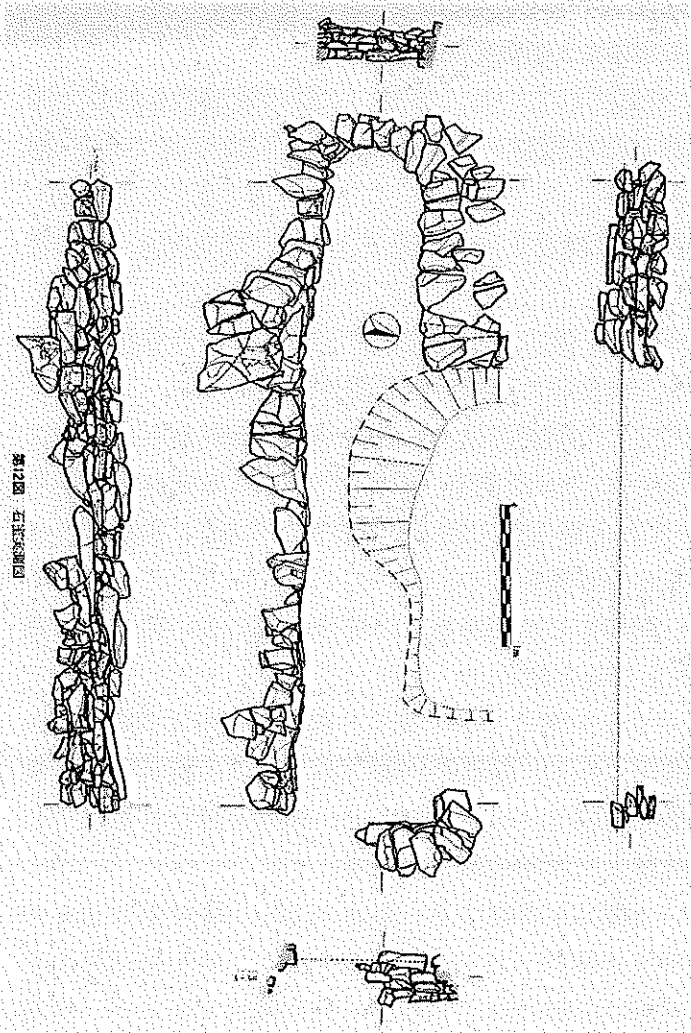


**図６　石室実測図と全景写真（右が北）**

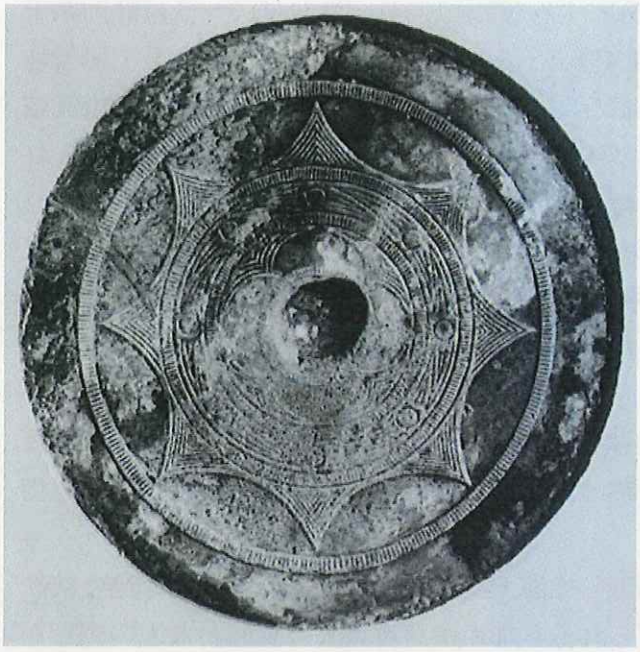


図９　伝和歌山県出土の内行花文鏡

当時発掘人夫として雇われた人の話によれば、昭和４年に下里古墳から出土した古鏡は内行花文鏡ということであるが行方不明である(土屋 2006)。

ところが愛知県熱田神宮に図９に提示した伝和歌山県出土の内行花文鏡が所蔵されている(田中 1981)。鏡は、直径 18.4cm を計測する。八花文で、四葉座が線表現されている。通常の内行花文鏡において内外の外周にある雲雷文帯が内行花文帯と四葉鈕座の間に移っており、その弧間と葉文間のそれぞれ平行山で充填されている。類似する倭鏡は福岡沖ノ島鏡に数点存在する。

同鏡は直弧文倭鏡の成立を探る手がかりになると田中氏は評価する。

４世紀後半、紀ノ川下流域に岩橋千塚古墳群が築かれ、紀伊において唯一、三角縁神獣鏡が副葬される。鏡は２面存在し、図 10 とした右の拓本はその内の三角縁波文帯三神三獣鏡一面であるが、残念ながら現存しない。

鏡が出土した古墳は、伝聞や古式の円筒形埴輪や壺形埴輪(朝顔形埴輪)が出土する花山８号墳が最も有力な候補である(河内 2006)。

花山８号墳は墳丘長 52mの前方後円墳で花山丘陵に築かれている。花山丘陵で古墳が築かれたのち岩橋山塊で古墳が継続して築かれていく。

紀北の前方後円墳と紀南の前方後円墳の規模に大差は無いものの埴輪配列や副葬品に格差が垣間見ることができる。

図 10　岩橋千塚古墳群出土の三角縁神獣鏡

## ３．紀伊沿岸古墳と海路

５世紀中ごろになって岩橋千塚古墳の北側、紀ノ川を挟んだ木ノ本地域やあるいは和歌山県と大阪府の境にある淡輪地域で周濠をもつ前方後円墳が築造される。両地域の古墳に見られる円筒形埴輪は“淡輪技法”が採用される(川西 1977)。

淡輪技法は須恵器系埴輪の製作技法のひとつであり、その特徴として底部に蔓などを環状にした痕跡を残す(鈴木 2010)。その一例を提示すると、図 11 の 1，2 は車駕之古址古墳の円筒形埴輪がある。この淡輪技法を持つ円筒形埴輪の存在から東海地方との関係をうかがえる事象とし看過できない。

図 11　淡輪系円筒形埴輪実測図（鈴木 2010 より）

## 4．まとめにかえて

下里古墳は単独で存在し、4 世紀後半に紀伊半島の南端に突如として現れ、それ以降に続く古墳は今のところ存在しない（図 12）。

海に面した砂堆などにつくられた下里古墳などを“海浜型前方後円墳”という。古墳を表象する視点からは、目標物であったことも考えられる（柏木 2015）。

平成 30 年に名古屋市博物館で展示において、海上で自分の位置を知る方法に「ヤマテ」といった簡易的な測量の方法が紹介されていた（藤井ほか 2018）。

図 12　紀伊半島の古墳分布

ヤマテとは、山稜を背後にした特色のある山を基点にして沿岸部にある古墳と合わせて海上の位置を特定する。下里古墳が潟港の位置を示す目印になったとするなら、その墳形が前方後円墳、あるいは鏡や杖形碧玉製品の存在から卓越した階層性を具えていたといえる。

古墳時代における近畿地域中枢部と東海地域を結ぶ経路には陸路と海路があげられる。今回の報告では海路に注目し、大阪湾岸・紀淡海峡・紀伊半島の南側を回り太平洋沿岸を行き交うルートを想定したい。伊勢湾の西側、ここでは尾張・知多の海とするが、海を通じて両者間に深い関わりが存在すると考えられている。今後は大阪湾を含めた紀伊半島と伊勢湾までを舞台とした海に関しての歴史と文化のつながり考えていきたい。